【緑地を楽しむ本】

『妖精の騎士　タム・リン』

絵／ウォリック・ハットン　再話／著／スーザン・クーパー　訳／もりおか　みち
小学館

これは、スコットランドに古くから伝わるバラッドを妖精学などに造詣が深いクーパーが再話したものです。

マーガレットはスコットランドの王女様。 ある日、ばあやの制止をふりきってお城を飛び出し、バラが美しいカーターヘイズの森へ走って行きます。 そこでマーガレットは、金色の巻き毛の青い目をした、息をするのも忘れて見とれてしまうほどの美しい若者に出会います。 おしゃべりをしたり、楽しい時を過ごしますが、ふと気づくと日がかげり、日の光が消えた途端、若者の姿も消えてしまいます。 マーガレットは急いでお城に帰りますが、なんとお城では1週間もマーガレットを探していたというのです。

マーガレットは再びカーターヘイズの森に行き、あの美しい若者に話を聞くと、自分はタム・リンで、ある伯爵の息子で三才になった時に妖精の女王にさらわれて、ずっととらわれているのだと言います。 そして、妖精と悪魔との間に7年ごとに人間の魂を一つ悪魔にわたすというとりきめがあり、今年は自分がひきわたされることになっているというのです。

マーガレットは、タム・リンを救おうと、妖精の女王に立ち向かいます。 それが、夏至の夜。「妖精族はその夜に、イングランドを通り、スコットランドを通って、はるかな国へと、世界じゅうの空を騎馬行進して通っていきます。」 月明かりの森の上を、馬や馬車に乗った美しい妖精たちが行進してゆく・・6月22日、夏至の夜には緑地の上にもそんな幻想的な光景が繰り広げられるかもしれません。

マーガレットが妖精の女王の魔術に立ち向かう場面はなかなかスペクタクルです。

（遠藤）